

II. [解説] F. シャトーレイノの「公共討議」論について

フランシス・シャトーレイノは、日本ではほとんど紹介されたことがなく、一読しただけでは内容が理解しがたい。著者から訳者への私信で、別の論文(2004a 等)で解説を付すよう、要請を受けた。この解説が、シャトーレイノの難解な議論を理解する上で、少しでも役立てば幸いである。

1. はじめに

ここ数年来、論争と公共討議というテーマが、STS 研究の最前線の一つをなしており、モノグラフ的な記述から、公共討議の場にのしかかる形式的制約に関する理論に至るまで、広範な研究蓄積が見られる。シャトーレイノは、原子力やアスベスト、BSE、GMO といった様々な問題をめぐる論争や公共討議を題材とし、「議論の力」が何に由来するかを同定するために言説分析を行う。公共討議においては、日常の経験、手続き的装置（例えばコンセンサス会議）、価値の表象（スローガンや政治的文書等）などが言語により表現されるため、そうした場で使われるテキストのコーパス分析をおこなったのである。以下、Chateauraynaud (2004a) をかいつまんで紹介し、その後に続く翻訳の解説としたい。

2. 論争分析の枠組み：内部主義と外部主義とのジレンマ

議論には、民主主義的秩序の根本にあるとされる討議に固有な自律性と、利害が絡むゲームとしてのグループダイナミクスという2つの側面がある。理論的には、ハバーマスに由来する公共空間の社会学と、カロン、ラトゥールらのイノベーション社会学との対立と言い換えることができる。シャトーレイノは、議論が抱えるこうしたジレンマを脱却する手法としてデュクロ (Ducrot 1996) に依拠する。デュクロによれば、言説の理解とは、言語構造からのみ引き出すことはできず、「発話の状況」からその理解が深まるとする。つまり、すべての発言は、発言された状況から切り離しては解釈できないのである。しかしながら、発言に意味を与えるために状況に依拠するからといって、言語的な構造を無視することはできない。言語構造の中に、状況を理解するための目印が存在するからである。まとめると、議論を理解するためには「発話行為に関わるもの、さらには発話者が発話する際の態度や、発話者とその聞き手との間で構築される関係についてなどあらゆる側面」を検討する必要があるのである (Ducrot 1996:340)。例えば、ある会議の席上で、ナノテクノロジーの専門家がリスクについての調査報告書を見直すべきであると発言したとしよう。この発話の状況は、その発言に使われた言葉と同等の重みを持つという考え方である。換言すれば、発話と、発話の状況がいかにして言説を構築するかということを視野に入れなくてはいけないのである。すべてが、言語という素材を取り巻くコンテキストの中にあるのではなく、ある議論におけるある特定の単語の使用は、議論の解釈の鍵を提示しているのである。

前述のデュクロのやや内部主義的なアプローチと対照をなす外部主義的な研究として、議論に現れるレトリックの分析をおこなったペレルマン (Perelman) の研究が挙げられる。ペレルマンによれば、議論の目的は「人々の同意を得ること」である。従って、発話者が、何が真実であ

ると信じているかを知ることではなく、発話者が語りかける人々がどのように考えているかが重要な研究課題となる。また同時に、身体的な動作、感情、空間の組織化、時間的な側面など、発話者と聞き手との間の関係に作用するそのほかの側面も研究の射程に入れる。例えば、科学的な知見は、レトリックとは無縁のものと考えられがちであるが、司法の場においては科学的知見がレトリックの材料として使われる場面が多くある。つまり、発話者は、それが裁判なのか、公共討議なのか、それとも日常会話なのか、といった状況に応じて異なった議論の枠組みを動員する。シャトーレイノは、こうした議論の組み立て作業に着目することで、内部主義と外部主義との対立を克服できると考えたのである。

3. 論争の終結について

シャトーレイノは、論争の終結の形態を4つに分類した。まず第一に、交渉によって、すべてのアクターが受け容れることができる状態になることで、論争が終結する。ラトゥールはこれを「力の試験のモデル」と呼んだが、異質な利害を統合してゆくモデルである。第二のモデルは、ホブズのリヴァイアサンよろしく、ヒエラルキー的上位の者による、「正統性の押しつけ」である。これはブルデューの「象徴的暴力」のモデルと言い換えることができる。ハバーマスの第三のモデルは、合意を「共通善」と関連づける。討議や論争は、規範的価値を巡る闘争であり、議論の是非は共通善に照らしあわされて検証される。最後のモデルは、「触知による自明性」と呼ぶモデルである。論争を終結させるのは、一部の共通感覚の変容である。つまり、あらがいがたい事実と証拠が提示されることにより、意見の異なる人の間にこれまでとはことなる共通感覚が生まれることにより論争が終結するのである。論争が起こると共通感覚が可視的するが、アクターは、見たり、触れたりできる物に関し新たな共通感覚を生み、新しい共通の目印を生み出すのである。

4. 議論の一般性への上昇

論争においては、議論の正当性の判断を下す原則と、状況に応じた経験との間での往復運動が起こる。つまりアクターは、原則と状況をうまく接合させ、議論を構築することが求められる。ボルタンスキとテヴノはこれを「一般性への上昇」と呼んだ。例えば、食品安全性に関わる対処法には、プリオンやGMOといった具体的な対象物を扱うに際して、きわめて一般的な判断および行動の原則となる予防原則に依拠するのが見られるのである。アクターは状況に応じて、ある状態、あるケースから、原則にまで至る連続体の中を移動しながら議論を構築するのである。

5. 警戒態勢をしくための「手がかり」

シャトーレイノの研究におけるキーワードの一つが、「手がかり」という概念である。シャトーレイノは、BSEや原子力、アスベストに関する言説に現れる「破局」や「警戒」という概念について、手がかりというキーワードを用いて論じている。「破局」は手がかりの欠如を示している。例えば、自動車事故は統計上リスクが高いのに、自動車の運転についてはそれほど警戒されていないのは何故だろうか？それは、ドライバー個人が安全性を確

保するあるいはリスクを回避する手がかりを持っているからである。自らがリスクにさらされないように警戒態勢をしくことができるからである。つまり最もありふれた経験を使い、状況を理解することができるのである。しかしながら、放射能やプリオンの場合はそうはいかない。見たり、さわったり、警戒のシグナルを感じ取ったりできない。日常的な経験による学習を通し危険を推し量ることもできない。また「適切な」警戒と、「不適切な」警戒について、科学的なあるいは規範的、法律的な判断もできないという状況である。このようにして、これまでの一連の経験が、危険を予知させる手がかりとならない場合、その問題に関する無関心、信頼、永続的批判などの態度を生むのである」(Chateauraynaud 1999:28)。このために、集団生活を送る上で適切な手がかり、また人々の共通感覚に照らして適切な手がかりを作成することで、妥当な警戒態勢がとられることになる。

6. 共通の計算空間

公共討議が可能であるためには、意見の異なるアクターの間でも共通の計算空間が存在しなければならない。共通の計算空間がなければ、一方にとっての論拠が、他方にとっての論拠とならない。社会学の課題の一つが、こうした共通の計算空間に存在する諸要素を同定することである。すべての公共討議に共通な形式的特徴とは、討議の対象物の配置、意見の異なるアクターにより受け入れ可能状態になるための試験と評価の実施である。討議の流れと討議から導き出された結論が受け入れられる可能性は、討議の対象となった対象物にたいする認知のされかたによると同時に試験のルーティン化の度合いにも依存する。

通常、公共討議は、既存の計算空間に依拠するが、討議の過程でアクターが新しい計算空間を生み出す場合もある。討議によっては、全く異なった論理を基礎とする討議へと発展することがある。例えば、電力発電量と、犠牲にされる森林の面積、環境への影響と雇用など、一見異なるロジックが同一の計算空間の中で扱われることがある。このように様々な論理が同一の計算空間で扱われるようになると、つまりさまざまな概念や知識、手法が可視化され、多様なアクターの参加が可能となる。

知識社会学、とりわけ専門知の社会学なしに公共討議という研究課題に取り組むのは困難である。計算空間には、専門知以外の知識も介在するが、専門知が討議の方向付けに多大な影響を与える。シャトーレイノは、専門知には二つの局面が連続体として存在するとする。一方では、対象物と身体との接触により生み出される専門知と、他方では、科学技術の長い歴史を経て確立され、精緻化された専門知である。また、次のような二項対立的な専門知の考え方を拒絶しなければならない。すなわち権威の行為としての専門知（専門家の権威が知識の妥当性を決定する）と単なる技術的行為としての専門知（専門家の技術性が知識の妥当性を決定する実証主義）である。

7. 専門知と共通感覚

すべての専門知は、共通感覚の上に構築されている。こうした共通感覚が存在するため（しばしば暗黙的に）、議論の余地のあることとないことの境界線引きが可能となる。換言すれば、共通感覚の存在が討議の組織化にとって不可欠な前提条件の一つである。しかしながら、共通感覚を構成するものについて（議論の余地のあることとないことの間の境界線について）不確実性が

存在し、結果、専門知の動員が必要となる。論争のダイナミズムは、専門知と共通感覚とが相互に規定しあっているさまと言い換えることができるよう。専門知は手がかりの非対称性として定義される（専門家のみが手がかりへのアクセスを有しており、「素人」はこのアクセスを持たない）。しかし共通感覚と根底的に断絶した専門知があり得るのか。こうした疑問は、ある研究ないし経験が、共有されているエヴィデンスを疑問視させるようなケースで提起される。暴露のオペレータとして機能することで、専門知は、表象の危機をもたらすこともある。世の中に存在する対象物が、我々の思っているような物ではないことを示すことにより、専門知は、様々なアクターをコミットさせ、アクターの共通感覚や共通の目印を変容させることもある。専門知は、アクターの認知の変化を強要することもあり、しばしば論争は政治的になる。

8. 「自明性」について

「科学的証拠」と対称的な証拠として「感覚から生まれる証拠」が存在する。感覚的、道具的、議論的なバリエーションに抵抗できるような頑強さを有する証拠は「自明である」と考えられる。シャトーレイノ（20004b:176）によると自明であるという感覚を産みだす三つの様式が存在する。まず身体を通じた知覚的作業がある。ついで顕著な出来事、経験により生み出されるショックがある。こうしたショックが起こっただけで、大多数のアクターに多大な影響を与え、その後に起こる一連の判断に影響を与えるような前例を作り出すのである。最後に、証拠の提示による自明性である。これは前述の2つの様式と比較し不完全で、警戒感を生み、論争が巻き起こり、公共討議を通じて再検討されるような自明性であり、集合的な合意に依存する。

9. おわりにかえて

シャトーレイノの言説分析では、アクターが自らの主張の正当性をどのように証明するかに焦点を当てている。この証明の過程を「集合的知覚的作業」と概念化することにより、討議が成される場（計算空間）に参加するアクターを個別に分析する合理モデルから脱却することができる。議論に参加するアクターは、様々な手段で証明を試みる。身体感覚による直接的証明、ネットワークの探求（データや証明の関連づけ）、統計的相関関係の提示（カテゴリー、計算空間、集合的表象）、再現可能な実験により得られるデータの提示である。

このように複数の証明の仕方は、いずれも自明性をもたらさなければならない。さらに、ある現象は、それが、別の調査者により導入される証明のバリエーションに耐えられるほど、自明なのである(Chateauraynaud 2004b:184)。

物質的統合及び定式化としての証明は、すべての登場人物たちに対して、対象物への再生可能な手がかりの可能性を与える。調査過程へのすべての登場人物たちの参加は我々の民主主義の理念であるだけではない。アクセス可能性は、証明をめぐる合意において決定的なのである。すなわち、証拠を提出する人以外の人々もまた、彼らがなじんでいた証明方法に囚われることなく、新たに、この証拠を生産することができなければならない。証明を管理することは、こうして、すべての登場人物たちが証明を産出できることを確保しなければならない。

さいごに、通常、科学技術をめぐる参加型評価手法や公共討議は、代表制民主主義を補完するためのものと概念化されているのに対して、シャトーレイノの研究は、萌芽的科学技術をめぐる

討議民主主義を，人々の身体感覚へと媒介する装置として位置づけたという点で，新たな研究の道筋を切り開いたということを述べ，資料編へとつなぎたい。

参考文献

Chateauraynaud, F., "Invention Argumentative et Debat Public. Regard Sociologique Sur L'origine des Bons Arguments" *Cahiers D'economie Politique*, No.47, L'Harmattan. 2004a.

Chateauraynaud, F., "L'evpreuve du Tangible. Experiences de L'enquete et Surgissements de la Prevue", in Karsenti, B. et Quere, L., ed. *La Croyance et l'Enquete*, Ed. EHESS. 2004b

Chateauraynaud, F., D. Torny. *Les Sombres Precurseurs. Une Sociologie Pragmatique de L'alerte et du Risque.*, Ed. EHESS. 1999.

Ducrot, O. "La pragmatique et l'etude semantique de la langue", in J. Revel et N. Wachtel (eds), *Une Ecole pour les Sciences Sociales*, Paris, Ed. EHESS. 1996.